第三十八回

国宝松本城 薪能（たきぎのう）

令和元年八月八日〔木〕午後五時三十分開会　国宝松本城二の丸御殿跡特設舞台

能　観世流
狂言　大蔵流

国宝松本城薪能は、おかげさまで三十八回を数え、市を代表する夏の風物詩となっています。

本年は、観世流・坂井音重師をはじめとする能楽師の皆様を迎え、国宝松本城二の丸御殿跡にて、幽玄の世界を繰り広げます。

番組は、坂井音隆師による「杜若　恋之舞」と、坂井音晴・坂井音重師による「融　クツロギ」の能二番に、山本泰太郎師による狂言「狐塚」が演じられます。

山並みが夕日に染まり、国宝松本城が浮かび出される頃、かがり火が灯されます。その炎に照らしだされた野外舞台で、鼓や笛が響き能楽師の舞が始まります。

日本の伝統に触れる真夏の夜をどうぞごゆっくりお楽しみください。

番組解説

◆能――「杜若　恋之舞」（かきつばた　こいのまい）

三河国、八橋で美しい杜若を眺める僧。そこに里の女性が僧へ呼びかけ、在原業平が伊勢物語の中で詠んだ「かきつばた」という歌を詠み、ここはその杜若の名所だと教えます。

女性は僧を自分の庵に招き入れると、業平と二条后であった高子の妃がかつて身に着けた形見の衣装を着て現れます。女性は自ら草木の精であると打ち明け、業平の歌の力によって草木までもが成仏できたのだと語ります。

やがて業平と高子の妃との恋物語、伊勢物語の故事を優雅に舞いつつ見せ、夜が白むと姿を消すのでした。

杜若　恋之舞
Kakitsubata Koi no Mai

◆狂言――「狐　塚」（きつねづか）

主人は狐塚という場所にある田んぼを群鳥に荒らされてはいけないと、太郎冠者と次郎冠者に鳥を追い払ってくるよう厳しく言いつけます。

夜になり太郎冠者と次郎冠者が一仕事を終えて休んでいると、ねぎらいの酒を持参して主人がやってきます。ところが二人は、主人が来たのを狐塚の狐が化けて出てきたのだと勘違いしてしまい…。

狐　塚
Kitsunezuka

◆能――「融　クツロギ」（とおる　くつろぎ）

京の都、六条河原の院。仲秋の名月に僧（ワキ）の前に現れる田子（汐汲道具）を担いだ二人の老人（前シテ）。老人はかつて左大臣・源融（みなもとのとおる）が、陸奥千賀の塩竈の景色をそのまま都に移し、風流を楽しんでいたのだと語ります。

今は後を継ぐ人もなく、この河原院は荒れ果ててしまったと嘆く老人。

僧に請われるまま、老人は都の名所を教え、やがて水を汲む様子を見せた後、姿を消します。

所ノ者が、かつてこの地に源融が邸宅を構えていた話を物語り、僧が眠りにつくと在りし日の姿で融の亡霊が現れます。月光に照らされながら昔を懐かしみ舞う融。夜明けとともに名残惜しくも面影を残し、再び月の都へと戻っていくのでした。

融　クツロギ
Tohru Kutsurogi

イラスト：當あかね